

おばあちゃんの三つ編み

金子 なつみ

私の祖父は、毎朝六時過ぎに私の家に私達姉妹が学校に出かけられるように手伝いに来てくれました。私の両親は教師で朝早く家を出てしまうからです。

私は、いつも「おばあちゃん、もう少しゆるく編んで」制服に着替えた後、しつかりと三つ編みを祖母にしてみよう事が日課でした。

祖母は、私の家から自分の家にもどると、自分達の家事をすませて、買い物にお夕食の仕度と、ゆっくりする間もなく一日を過ごしていました。

私が小学一年生の冬休みに祖母が突然、脳梗塞で倒れ、入院しました。左側が麻痺して話すことも歩くこともできなくなりました。祖母は、少し震えた字で「なつちゃんの髪の毛をまた編めるように、がんばるからね」とメモに書いてくれたのを今でも覚えています。

祖母は、看護師さん達もびつくりするほどリハビリに励み次第に話をするようになってきたようになり左手、左足も少しずつ動かすことが出来るようになってきました。母は祖母が倒れてから、「こんなにも沢山お世話になって私達は生活できていたんだね。心から感謝しなくちゃいけないね。」と毎日言っています。

「髪の毛を短く切つてしまえば朝慌てずに学校に行けるのに」と言っていた母ですが、

「毎朝おばあちゃんが一生懸命編んでくれていた三つ編みだから

ら今度はお母さんが頑張るからね。」と祖母の代わりに私に編んでくれるようになりました。一日中くずれずに、ほつれない祖母の三つ編みとは違って母の三つ編みは、三時間目が終わる頃にはくずれてきてしまうけれど私には、「今日も頑張つてね」という母の気持ちと祖母の気持ちが込められているような気がしています。

学校から戻ると、歩くことが難しくなってきた祖父が車で駅に迎えに来てくれて、「なつちゃん、おかえり。ご苦労様。今日も学校楽しかったかい？ 今日のおやつは大好きな○○だよ。」と優しく話しかけてくれます。

いつも私は、疲れていても祖父と話すと何だかホッとできます。

今、私は自分で三つ編みができるように練習しています。祖母のような三つ編みができるようになりたいです。今でも私達の事を思い沢山の事をしてくれる祖父母への感謝の気持ちをお忘れずに、これからは自分出来る事で力になれる事をしていきたいです。

私が元気に学校に通うことができるのは本当に祖父母のおかげです。

「おじいちゃん、おばあちゃん、いつもありがとう。これからも長生きしてください。」